

多様な視点で事象を見つめ、主題を解明していく学びを構築する

－戦争のない平和な未来社会を創り上げていくための資質・能力を培う授業（第9学年）－



授業者 森 川 禎 彦

「二度と戦争をしないためにはどうしたら良いのだろうか？」多くの惨禍をもたらした日中戦争・第二次世界大戦・太平洋戦争。この戦争は本当に避けることができなかったのだろうか。戦争に至った要因を多様な視点から調査し、どうしたら避けることができたのかを協働で考えていく。過去の戦争から学び、平和な未来社会を創り上げていくための資質・能力を培っていく授業。

1. 学びの構想

戦争について学ぶことの意義

2022年2月から始まったロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、未だに解決の糸口さえ見えない。そして、これに伴う石油価格や穀物価格の高騰は、日本に住む我々の生活に大きな影響を与えており、決して対岸の火事ではない。また、子供たちは、連日報道されるウクライナの惨状をテレビやインターネットを通して見聞きすることも多く、この問題に対する関心は高い。

このような現状に鑑み、戦後77年を迎え、戦争を直接体験した世代の高齢化が進む中で、次世代を担う子供たちに戦争についての認識を育成することの重要性は、学校教育にとってより重要なものとなっている。

もちろん戦争をなくし、平和の実現に向けて実践していく子供たちを、特定の教科にこだわらず学校の教育活動全般を通して育成しようとすることに異論はない。

しかしながら、国民精神を対外戦争へと動員するための手段として機能した戦前教育の反省の上に立ち、戦後、新教科として誕生した社会科は、「国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力」の育成を教科の目標としており、戦争と平和について、とりわけ大きな責任があると言える。

また、戦争の問題は、国家体制のあり方に関わるだけではなく、子供たちの将来にとって生命に関わる事態を招きかねない問題であり、子供たちにとって学ぶ意義が大きい。本校社会科では、7年間で目指す人物像として「社会に生きる『市民』として、よりよい未来を創り上げようとする人」を掲げており、本実践はまさにそのための中心となるものであると考える。

戦争について自ら追究し解明する学びを求めて

2015年に朝日新聞が行った世論調査では、1945年8月15日に終了した戦争について、「日本人がなぜ戦争をしたのか、自ら追究し、解明する努力を十分にしてきたと思うか」という問いに対し、「いまだ不十分である」と答えた人が、65%であったという結果がある。

このことは、これまでの社会科教育において、個別の戦争の原因と結果、影響などを一つひとつ取り上げて網羅的に学習するというものであったことも大きな要因であると考えられる。つまり、知識の伝達に終始するあまり、子供たちにとってその知識を批判的に吟味し、戦争や平和について主体的に思考する機会が奪われている点に問題がある。

子供たちに戦争に反対し、平和を希求する心情を育成することは意識しつつも、戦争や平和について、自分はどう向き合っていくべきかを子供たちが主体的に考えていくことを支援することが必要ではないだろうか。

本単元では、二度と戦争をしないために、「戦争を避けることはできなかったのか」という視点をもちながら、子供たちが様々な主張を知り、それらを批判的に検討しながら協働で探究していく。

2. 学びのストーリー

(1) 戦争もたらした惨禍について考える

(第1時)

本単元を始めるにあたり、特攻隊に関する映像を見せた。多くの子供たちは、特攻隊について何となく知っている程度であった。多くの若い男性が隊員として飛び立ち、亡くなっていったことを映像を通して知ると、教室は静まり返った。そして、7名の特攻隊員が残した遺書を子供たちと読んだ。理央は、次のような感想を残している。

「人生 50 年、自分は 20 歳まで長生きしました。残りの 30 年は父母上に、半分ずつさしあげます」・
・あまりにもショックでした。遺書を受け取ったこの隊員の両親は、とても辛い日々を過ごしたんだと思う。戦争で戦う人には大切な家族がいる。この事実は絶対に忘れてはいけない。また、直接戦っていなかった人々のことを知ること大事だと思う。なぜこんなことが起きたのだろう。二度とこのような戦争をしないために、戦争について真剣に考えていかなければならない。

これまでの単元でも、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦と「戦争」について探究してきたが、何かが欠落しているという思いがあった。それは、「人」の存在である。例えば、日清戦争では日本に約 1.4 万人の死者が出たが、あくまで過去の出来事として、そして、無味乾燥の「数」として子供たちの中で扱われていた。戦争は国家と国家など集団間の争いについて考えていくが、戦争で亡くなった一人一人にも、私たちと同じようにかけがえのない人生がある。その人生が奪われる戦争の惨禍について、まず目を向けることで、本単元を学ぶ意義を考えたかった。子供たちは、その後も東京大空襲や原爆を経験した方々の手記などを読み、戦争が国民に与えた恐怖に思いを馳せ、本単元を一人の国民として真剣に学んでいく決意を固めていった。

(2) 子供と共にこれからの学びを考える

(第2時)

二度と大きな惨禍をもたらす戦争をしないために、本単元をどう学んでいくべきかを子供たちと考えていった。各グループで話し合い、「戦争にまで発展した理由」「戦争が国民の生活に与えた影響」「戦争を止めることはできなかったのか」「戦争は本当に避けられなかったのか」という、学んでいきたいことがいくつか提案された。

太一：まず「戦争にまで発展した理由」を調べなければ何も分からないよね。

梨乃：「戦争が国民の生活に与えた影響」も同じ。それらを踏まえて「戦争を止めることはできなかったのか」や「戦争は本当に避けられなかったのか」について議論していくべき。

理央：「止める」と「避ける」は似ているけれど、「止める」はもうすでに戦争が始まったということが前提になってしまうから何か違うと思う。

浩二：二度と戦争をしないために学んでいくんだから、戦争を「避ける」のほうがいい。

子供たちは、調査して分かる事実認識と、そのうえで議論していきたいことを区別していった。また、「止める」と「避ける」という言葉の違いにまでこだわりながら議論していくべきことを明らかにしていった。また、戦争の要因を知ることにも留まらず、これからの未来に活かされていけるような学びにしていきたいという思いがあったようである。こうして、「戦争は本当に避けられなかったのか」という本単元の主題が設定された。

次に、金融恐慌から終戦までの出来事を一覧にした年表を見ながら、どの時点なら戦争を避けられたかを予想していった。その結果、「満州事変（1930）から日本の国連脱退（1933）」「日中戦争の開戦（1937）」「日独伊三国同盟（1940）から太平洋戦争の開戦（1941）」の3か所に戦争を避けられたかもしれないポイントがあると予想し、それぞれの事実を確認しながら議論していくことになった。

(3) 満州事変(1930)から日本の国連脱退(1933)までについて議論する

(第3時)

まず、「満州事変（1930）から日本の国連脱退（1933）」について議論していく。国際連盟の脱退によって日本が国際的に孤立していったことが、戦争を避けられなくなった要因であると理央をはじめとした多くの子供たちは考えていた。その孤立が他国との対立を生み、戦争につながっていると予想していた。

そこで、各グループで、なぜ国際連盟の脱退に至ったのかを調査していった。すると、国際連盟の脱退は、世界恐慌などの影響による国内の経済の混乱を解決する手段として満州事変を引き起こしたことが原因になっていったことが分かってきた。そこで教師から、当時の経済的混乱を乗り切るためにどうすればよかったのかについて議論していくことを提案した。

夏美：日本もイギリスやフランスのようにブロック経済をして乗り切るべきだったのでは？

公太：でもそれはイギリスやフランスのように多くの植民地を持つ国だからできたんじゃないかな。このころの経済圏を見ても明らかに日本は無理だと思う。

理央：資源のない日本は、植民地を得るために軍事行動するのではなく、友好的に貿易をするべきだったのでは？

太一：どこの国が友好的に貿易してくれるの？そうか！だから同じように植民地の少ないドイツやイタリアに近づいていったのか。でも、ファシズム諸国と近くなるのは良くない気がする。

理央たち1班は、世界恐慌に対する各国の対応を参考にしながら考えていった。しかし、各国の対応をそのまま日本に当てはめて解決することは困難であると判断し、別の対応を導き出そうとしていた。しかし、納得できる対応が見つからず悩んでいた。理央は、本時の振り返りで次のように記述している。

満州事変がなければ日本の国際連盟脱退もなかったと思うし、戦争を避けることにつながったと考える。しかし、当時の状況を考えると軍事行動を起こして植民地を広げずにどうやって経済を立て直していけばよかったかは分からない。軍事行動は仕方なかったと考えたくないし、ファシズム諸国に近づくのも良くないけれど、国民の生活を救うためにはどうすれば良かったのだろう。

理央は、「国民」という視点にこだわりをもっているようだった。他国への軍事行動は良くないとは分かっている。しかし、ではどうすれば良かったかについて、納得のできる方法が見つからない。国民の苦しい生活を救うためには仕方がなかったのかもしれないと発言する子供もいた。

当時の苦しい日本の状況を知れば知るほど、悩む様子があった。

（４）日中戦争の開戦（1937）について議論する （第４時）

次に２つ目のポイントとされた「日中戦争の開戦（1937）」について議論していく。

五・一五事件で政党政治の時代が終わり、二・二六事件を経て、軍部の発言力が高まっていく中で、日中戦争が始まり、長期化していく状況をグループで確認していった。そこで教師から、ここで戦争を避けたり、止めたりできたのかについて議論していくことを提案した。

公太：国際的に孤立を深める日本は、戦争をするしか資源を得られない状況だからもう止められない。

夏美：中国には援蒋ルートがあり、他国からの支援によって長期化していった。長引くほど資源のない日本にとっては被害が増えるだけだし、もう止めるべきだった。

理央：今更止めると、ここまで我慢を強いられてきた国民から批判があるかも。

多くの子供たちは、長期化する日中戦争を止めることは難しいと判断していた。この議論を通して、戦争は一度始めたら止めることの難しい状況になるということが見えてきた。

（５）日独伊三国同盟（1940）から太平洋戦争の開戦（1941）」までについて議論する （第５時）

最後のポイントである「日独伊三国同盟（1940）から太平洋戦争の開戦（1941）」について議論していく。

日中戦争が長期化する中で、資源が不足していた日本は、東南アジアに向けて南進していき、その結果、日米関係が悪化していったことをグループで確認していった。そこで教師から、主にアメリカとの戦争である太平洋戦争は回避することができたのかについて議論していくことを提案した。

しかし、教科書などでは資料が不足していたため、太平洋戦争に至るまでの日米交渉についての資料を追加で配布した。この資料では、何度も日米交渉を行い、互いの妥協点を見いだそうとしたが、最終的にはアメリカからのハル・ノートを拒否した日本が、開戦を決断したことが分かる。

浩二：ハル・ノートは日本にとっては不利な条件だけど、これ以上被害を大きくしないためにも受け入れるべきだったと思う。

怜央：日本にとっては、とてもハル・ノートの内容は受け入れられない。物資も不足している状況だから今更引けない。

公太：開戦すると、国民がますます苦しい生活になる。まだ交渉の余地があったはず。

夏美：資料を見ると、アメリカとの戦力差は圧倒的。鉄や石油の輸出も制限・禁止されているし。確かに更に国民に負担をかけることになるから避けるべきだとは思うけど避けるのは難しい。

理央：国民はどう思っていたんだろう？国民が支持し

てるなら日本は強気にならざるをえない。

日本にとっては勝ち目のない状況でありながらも開戦せざるを得ないところまで追い込まれていたと多くの子供たちは判断しているようであった。

また、子供たちの議論を聞いていると、写真1のように、「国民」という言葉が多く出てくることに気づいた。

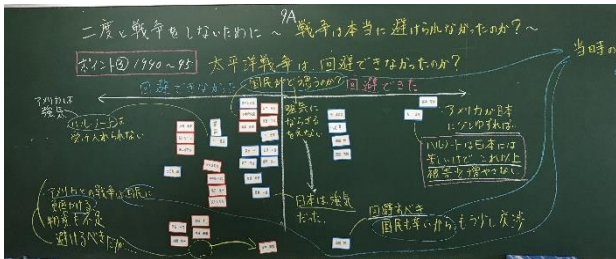


写真1 「国民」という言葉が多い（青色で囲んである）

そこで教師は、「『国民の生活のために』とか、『国民が支持していた』という意見が多いけれど、国民には戦争を止められなかった責任はないのか？」と問うた。

子供たちは、口々に「ない」や「ある」と叫んだ。そこで、次時でこれについて議論することになった。

（6）国民の戦争責任について考える

（第6～7時）

議論するにあたり、どの立場を「国民」とするかを子供たちに確認したところ、「軍人以外の一般国民」と定義することになった。そして、教科書や資料集から当時の国民の様子を探し、グループで議論していった。

公太：治安維持法などで軍部による反対運動や 戦活動を弾圧されていたから、もし戦争反対でも言えない状況だし、責任はない。

理央：ミッドウェー海戦で実は負けていたことも国民には正確に伝えられてなかったから責任はない。そんな状況の中で、責任があるっていうのは当時の国民が可哀そう。

夏美：あくまで当時の軍人を中心にした政府の責任。戦争を支持させられていたんだから。

多くの子供たちは、情報や言論が統制され、隣組の制度で、住民同士が監視し合っていたような状況において、一般国民の責任を問えないと判断しているようだった。

しかし、あるグループで義知が次のような意見

を述べた。

義知：でも、その政府を選挙で選んだのは国民なんじゃないのかな。

教師は、この意見をクラス全体に広げた。すると、新たな議論が起こった。「確かにその通りだ」という賛同の意見と、「そもそも選挙の時に正確な情報が与えられていたのか疑わしい」という反対意見が出された。

このときのことを、理央は、振り返りシートに次のように記述している。

国民に戦争を止められなかった責任はないと思う。正確な情報を与えられていなかったことも大きい。戦争を止めるにはかなりの人数が団結しなければならなかった。戦争の肯定が「普通」だと思われていた当時は、おかしいと思っていてもなかなか言えない状況だった。

このような日本になってしまった理由については、世界恐慌からでなく、もっと前の日本から考える必要があると思う。グループで話し合ったとき、戦争を避けられなくなった理由は明治時代の戦争からつながっているのかもしれないという意見が出た。

この記述によって教師は、あることに気づいた。理央たちは、これまでの学びをつなげて考えていた。そこで、クラス全体に、写真2の明治時代の単元のときの板書を提示した。

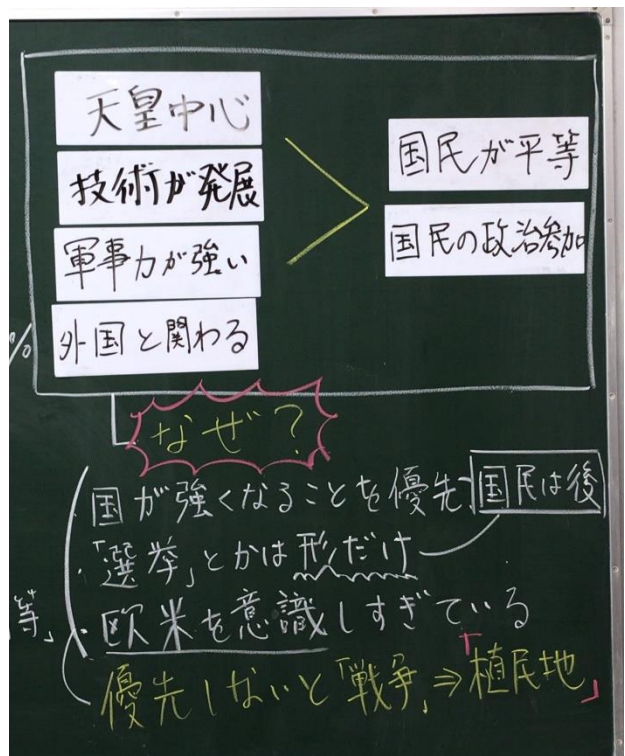


写真2 明治時代の単元のときの板書

明治時代の単元では、「明治政府の目指した国は実現したのか」という主題のもと、どのような国を目指していたのかを6つにまとめ、実現したかどうかを判断していった。写真2は、その最終判断のときの板書である。明治政府は、国家を強くすることを優先したため、「国民が平等」「国民の政治参加」は後回しだったり、形だけのものであったりしたという結論であった。その結果、大日本帝国憲法では、人権は、「臣民の権利」として法律で制限されていた。

子供たちはこの板書を見ると、そのことを思い出したようであった。基本的人権が認められていなかったり、国民主権ではなかったりしたことが、国民の自由な言論などを統制する戦時下の政府を生み出したということに気づいていった。

(7) 二度と戦争をしないためには

(第8時)

これまでの学びを振り返り、二度とこのような戦争を繰り返さないために必要なことを議論していった。その際、考えていく視点として「私たち(国民)」「日本」「世界」の3つのカテゴリーで考えていくようにした。写真3は、理央たち1班の作成したホワイトボードである。

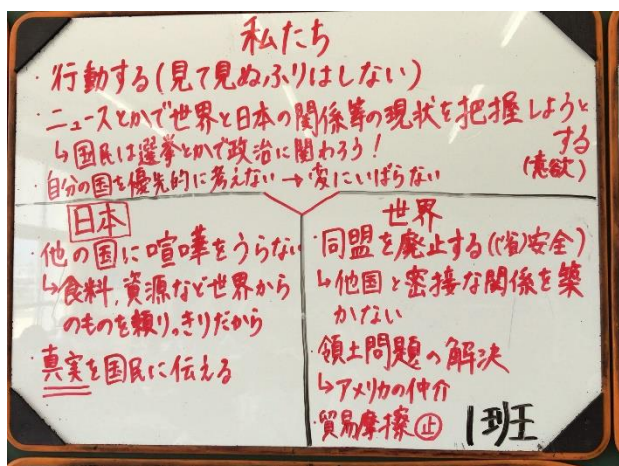


写真3 二度と戦争を繰り返さないために必要なこと

太一：「日本」としては、やはり他国と友好関係を保つことが大事じゃないかな。日本は、資源や食料に乏しいから特にそうだよ。満州事変のように侵略した結果、国際的に孤立したわけだし。それが戦争につながっていったんだから。

公太：真実を国民にしっかりと伝えるべきだよな。戦争中に情報が統制されたり、真実を隠されたりして国民に伝えられてなかったことも良くなかった。

夏美：「世界」については、あまり密接に他国と関係を結びすぎるのも逆に良くないのかも。日独伊三国

同盟を結んだことが連合国との対立を深めたから。

理央：「私たち」としては、ニュースとかで世界と日本の関係等についてしっかりと現状を把握するのが大事。そのうえで、自分で判断していかないと。国民にも責任あるよ。だから選挙に行って政治に関わることも大切。

このように、どのグループもこれまでの学びを通して考えたことを具体的な事象とともに総括していった。そして、それをどう未来に活かしていくかについても言及していた。

その後、クラス全体で考えを共有したが、予想以上に「私たち」について、「選挙に行く」という意見が多かった。国民として、二度と戦争をするような政府にしないために責任をもつという強い意思の表れであると考ええる。そして、「日本」について、そのために「国民主権」「人権の尊重」「平和主義」が大切であるという意見が出されていた。

そして、単元を通しての学びについてレポートを書き、単元を終えた。

理央は、次のように自身の学びについて振り返っている。

単元のはじめに、特攻隊の方々に関する動画や資料を見て、ただただ悲しくなったが、単元を終えた今では、戦争はどの立場の人をも不幸にし、決して繰り返してはならないものだという気持ちが強くなった。

これまで避けられたポイントについて考えてきた。実際に避けられたポイントはたくさんあったと思う。しかし、もし避けていたら本当に戦争に巻き込まれずに済んだかどうかは分からない。個人的には、いきなり大きく間違えた判断はなかったと思うが、少しずつ道を踏み外して、もう取り返しのつかない状況になっていったと解釈した。そう考えると、今の戦争をしていない現状を維持し続けることがいかに難しいかが改めて分かった。この現状を維持するために、日ごろからニュースや新聞を読むなど、自分に出来ることから一つずつしていきたい。

3. 省察

一国民として学びを捉え続ける

なぜ理央をはじめ多くの子供たちは、最後まで「国民」の立場にこだわっていたのだろうか。

おそらく第1時が大きく影響していたと考えられる。本単元では、日本と世界の動きに着目しながら、戦争を避けられなかったのかについて判

断していったが、常に子供たちの中には、国民としての視点があったのではないだろうか。確かに、軍部の発言力が増し、五・一五事件以降の政府の中枢を担っていたのは軍人だったのかもしれない。だからこそ、一般国民が戦争に動員され、多くの命が失われたという第1時で学んだことを胸に深く刻んだ子供たちは、一国民としての立場を大切にしながら過去の戦争と向き合っていたと考える。

子どもと共に学びの価値を繰り返す

理央は最後のレポートで、「いきなり大きく間違えた判断はなかったと思うが、少しずつ道を踏み外して、もう取り返しのつかない状況になっていったと解釈した」と述べている。これは、日本がなぜ戦争を避けられなかったのかについて、追究し、解明した結果、導き出された彼女なりの結論である。

単元を通して、戦争を避けられかどうか議論していく中で、子供たちは当時の状況を多面的に考えていったがゆえに、簡単に避けられる状況ではなかったことに気づいていった。しかし、これからの未来において、この学びは価値あるものとして活かされていくだろう。

また、その価値を繰り返すことにつながったのは、国民の戦争責任について議論した場面ではないだろうか。理央が、「このような日本になってしまった理由については、世界恐慌からでなく、もっと前の日本から考える必要があると思う。グループで話し合ったとき、戦争を避けられなくなった理由は明治時代の戦争からつながっているのかもしれないという意見が出た」と記述したことから、明治時代の学びとのつながりを見いだすことができた。このように過去の単元とのつながりを見いだすことが学びの価値を繰り返すことにつながるのかもしれない。